日本ヘーゲル学会

第３４回研究大会

2023 年 6 月 3 日（土）・４日（日）

ハイブリッド開催

会場：宇都宮大学

峰キャンパス　８号館　８D11 教室

開催校責任者：山田有希子（宇都宮大学）

〒321-8505 栃木県宇都宮市峰町 350／TEL 028-649-5275（共同教育学部 哲学・倫理研究室）

＊オンライン参加方法については別添のオンライン大会マニュアルをご参照ください。

日本ヘーゲル学会事務局

〒157-0066 東京都世田谷区成城 6-1-20 成城大学文芸学部ヨーロッパ文化学科　下田研究室

TEL: 03-3482-9515 ｜ E-Mail: hegel-jimukk@hegel.jp ｜ 学会 HP：http://hegel.jp

郵便振替口座: 00150-1-10718 日本ヘーゲル学会

【開催会場】

（1）個人研究発表・シンポジウム・合評会・講演・総会：８号館　８D11 教室

（2）会員控室：８号館　２F　小会議室

＊大会へのオンラインでのご参加は、学会 HP 上「第 34 回研究大会特設サイト」からお願いします。パスワードが必要です。詳細は「**オンライン大会マニュアル**」を併せてご覧ください。マニュアルは HP 上でも随時更新予定です。

【プログラム】6 月 3 日（土）峰キャンパス　8 号館　8 D11 教室

● **10 時 00 分～10 時 40 分：個人研究発表（１）**

「なぜ不幸な意識はおのれを「外化」するのか」

発表：久保篤史（京都大学）
司会：飯泉佑介（京都大学）

● **10 時 45 分～11 時 25 分：個人研究発表（２）**

「マクダウェル・ヘーゲル・手話」

発表：髙山守（東京大学）
司会：川瀬和也（宮崎公立大学）

● **11 時 30 分～12 時 10 分：総会**

休憩（12 時 10 分～13 時 30 分）

● **13 時 30 分～17 時 00 分：合評会**

小井沼広嗣（岐阜聖徳学園大学）『ヘーゲルの実践哲学構想　精神の生成と自律の実現』（法政大学出版局、2021 年）
司会：片山善博（日本福祉大学）
評者：濱良祐（同志社大学）
　　岡崎龍（イエーナ大学）
　　竹島あゆみ（岡山大学）

● **17 時 30 分～19 時 00 分：懇親会　宇都宮大学　生協食堂**

会場案内は 9 頁以下参照

【プログラム】6月4日（日）峰キャンパス　8号館　8D11教室

● **10時00分～12時00分：特別講演**

山口祐弘（東京理科大学）

「ヘーゲルにおける思弁哲学の復権―形而上学の蘇生と論理学の課題―」

司会：杉田孝夫（お茶の水女子大学）

休憩（12時00分～13時00分）

● **13時00分～13時10分：研究奨励賞授賞式**

● **13時10分～16時00分：シンポジウム**

「ヘーゲルと近代ドイツのスピノザ主義」

提題：　佐山圭司（北海道教育大学）
　　山脇雅夫（同朋大学）
　　吉田達（中央大学）
司会：　川本隆（東洋大学）
特定質問：真田美沙（ハイデルベルク大学）
　　久冨峻介（京都大学）

【要旨】

【個人研究発表１】

なぜ不幸な意識はおのれを「外化」するのか　　久保篤史（京都大学）

「外化 Entäußerung」が『精神現象学』において重要な概念であることはよく知られている。明示的に「外化」を扱っている研究はもちろん、マルクス研究との関連で注目されてきた「疎外 Entfremdung」や宗教的側面で扱われる「犠牲 Aufopferung」など、広義に解したところの「外化」を取り上げたものも含めれば、これまで外化概念は広く論じられてきたとすら言える。しかし、こうした先行研究において等閑視されてきたのは、おのれを否定し外化しておのれにとって疎遠になったものをおのれのものとして取り戻すという精神の運動が、『精神現象学』のなかでそもそもどのようにして導入されているのか、という基本的な問いである。このことは、（広義の）外化が取り上げられるときに精神章や宗教章にばかり目が向けられている事実に象徴的に示されている。そこで本報告は、序論を除けば『精神現象学』で初めて「外化」が登場する自己意識章の不幸な意識の議論を取り上げ、この箇所においておのれを外化する精神の運動の原型が展開されていることを明らかにしたい。この箇所は（広義の）外化を扱う先行研究では無視されるか、一言触れられる程度に留まっており、厳密なテキスト解釈はほとんどされてこなかった。本報告はこの箇所を正確に読み解くことにのみ注力するが、この作業を通して、この箇所が『精神現象学』全体のなかで重要な役割を担っていることを大々的に証明はできなくとも、そうなっているようだと一定の示唆を与えるところまでは行き着きたいと思う。

あらかじめ本報告の解釈方針を述べておこう。当該箇所のテキスト解釈で鍵になるのは、理性が二様に定義されていることである。周知のように、自己意識章の末尾では、「in seiner Einzelheit absolut an sich oder alle Realität zu sein」という意識の確信が「理性」として定義される。従来、oder 以降の後半ばかりが注目されてきたが、本報告はこの前半の意味を明確に示したうえで、この定義の前半部から後半部への移り変わりにおいて「外化」が役割を果たしていることを示す。その際にはこの前半部の「absolut an sich」を文法的にどう解釈するか（「絶対的に即自的である」または「即自的には絶対的である」）が問題になるが、これは理性章の導入部、精神章の法状態、宗教章の喜劇を参照することにより解決する。これと同時に、なぜこの箇所で「in seiner Einzelheit」という但し書きが付されているかも明らかになるだろう。このようにして正確なテキスト解釈をすることにより、当該箇所において、おのれを外化する精神の運動が原初的な形で提示されていることが示されるだろう。

【個人研究発表２】

マクダウェル・ヘーゲル・手話　　髙山守（東京大学）

マクダウェルは、その論文集 Having the world in View において、自ら「異端的」であると称する独特のヘーゲル論を展開する。本発表は、はじめに、このマクダウェルのヘーゲル論を追う。(I. 1)このヘーゲル論は、まずは、『精神現象学』における「生死をかけた闘争」をめぐって展開されるが、その論点は、この闘争が二者間の闘争ではなく、一個同一の自己意識内部の闘争であるという点である。その論拠は、「他者の死を目指す」行為を、ヘーゲルが「他者の行為」であると規定しているということである。(I. 2)さらにマクダウェルは行為論へと展開し、「私たちがいかに考えいかに行為するかについては、全面的に自分自身を当てにするしかない」ということこそが、「『精神現象学』の進展の帰結である」と論じる。ついては、私たちの行為の根拠を、歴史的に構成された社会規範に見て取ろうとするピピンの論議を「構成主義」であるとし、ヘー

ゲルはそうした「構成主義」は採らないと批判する。

マクダウェルは、こうしたヘーゲル論を、自らの主張と重ね合わせるわけだが、(II)その限りでマクダウェルの提示する重要論点が、Mind, Value, Reality に展開される徳論である。すなわち、私たちは、自らの行為を選択・決定する際に、一般的に妥当する社会規範を根拠にすることはできないという、この意味で「無根拠性」のただなかに置かれるわけだが、そうしたなかで、この選択・決定をどのように行なうのか。ここにマクダウェルは「有徳な人」という概念を導入する。この概念を媒介することによって、正しい選択・決定が行なわれうるというわけだが、この概念は、ヘーゲルの論じる「陶冶」の概念と軌を一にすると見うる。

さて、(III. 1)マクダウェルは、こうした論議を「価値」の実在論へと展開する。それによれば、私たちの行為選択は、そのつど異なる個別的な状況下でなされるがゆえに、「成文化」することができない。にもかかわらず、私たちがこの選択・決定を行ないうるのは、行為の正しさ・善さという道徳的な価値が実在しているからであるという。(III. 2)こうした論議は、音声言語においては、行為決定の際の思考が一般概念によって行なわれるため、了解しにくい面がある。すなわち、音声言語においては、行為の選択・決定は、「成文化」によって求められがちなのである。(III. 2)これに対して、手話言語の根底にある画像思考においては、一般概念が保持されつつも、そのつどの個別的な状況が、個別的な状況そのものとして思考され、行為の選択・決定がなされる。この点で、これは、マクダウェルの論議の論拠の一端を提示するものとなりえよう。(III. 3)最後に、ヘーゲル『精神現象学』における「美しい魂」の論議を追うことによって、ここでの行為論が、マクダウェルの行為論と、相当程度ぴったりと重なり合うことを確認する。

【シンポジウム：趣意説明「ヘーゲルと近代ドイツのスピノザ主義」】

本シンポジウムは、スピノザ論争以降の近代ドイツにおけるスピノザ主義とヘーゲル哲学の関係を改めて問うことを目的とする。企画の背景には、１）近年、日本においてヘルダーの『神』とヤコービの『スピノザ書簡』の翻訳書が出版され、近代ドイツにおけるスピノザ主義に関連した書籍や論文も相次いで公刊されていること、また２）歴史的に存在したスピノザ主義のみならず、一つの哲学的立場としてのスピノザ主義とヘーゲル哲学との関係についても、世界的に注目が集まっていることがある。さらに３）日本ヘーゲル学会では、2011 年大会にてシンポジウム「ヘーゲルとスピノザ」が開催され、多くの成果を挙げる一方で、最終的には〈ヘーゲルが対決したのは、スピノザというより、当時のスピノザ主義だったのではないか〉という問題に焦点が当てられ、大きな課題が残された。今回は、この課題を引き受け、スピノザ哲学そのものではなく、「スピノザ主義」の観点からヘーゲル哲学の意味と意義を再検討する。
登壇者３名の方々には、これまでのご研究の成果から、主に下記の論点からの提題を展開していただく。
佐山氏は、ご高論「ヘーゲルとスピノザ受容」の成果とともに、ヤコービを経由したスピノザ主義のヘーゲルへの影響について論じていただき、ヘーゲルのスピノザ受容に関する総括的な論点を提示いただく。

それをうけ、山脇氏には、長年ご研究されてきたヘーゲル論理学と宗教哲学に基づいて、スピノザ主義を介したスピノザ哲学の受容について論じていただく。

吉田達氏は、ヘルダー『神』の翻訳を出版され、スピノザ論争への造詣も深い。今回は、そのご研究の成果とともに『精神現象学』におけるスピノザ主義の影響や関係について論じていただく。

また今回は、シンポジウム企画の新たな試みとして、「特定質問者」制を導入した。若手研究者の真田美沙氏、久冨峻介氏には、シンポジストの提題への質問を提示していただき、フロアとの議論の場を開いていただく。

【提題１】

ヘーゲルのスピノザ受容　　佐山　圭司（北海道教育大学）

若きヘーゲルが哲学を学びはじめたとき、それまでドイツの思想界を支配していたライプニッツ＝ヴォルフ哲学が勢力を失い、カントの批判哲学が新時代の到来を告げていた。だが、カント哲学の浸透とともに、その問題点も明らかになってきたのである。それゆえカントに続く哲学者たちは、新時代の「はじまり」を歓迎しつつも、カントを超える新しい哲学を模索していく。

そこに青天の霹靂のように登場したのが、ヤコービの『スピノザ書簡』である。当時の若き哲学徒たちの手引きとなったのは、ヤコービの『スピノザ書簡』とそれを批判したヘルダーの『神』である。これらは、スピノザ哲学の紹介と普及を目指して書かれた解説書ではなく、燃え上がる論戦の最中に書かれた論争書であった。

同時代の多くの知識人と同様に、青年ヘーゲルも、スピノザの哲学を直接、つまりスピノザの原典から学んだわけではなかった。彼が学んだスピノザは、すでに他者の目を介したスピノザであった。しかもスピノザの時代とは異なる哲学的コンテクストにおいて論争の渦中にあったスピノザであった。これはヘーゲルのスピノザ受容を考えるうえで決定的に重要である。

ヘーゲルがスピノザに立ち帰るのも、まさに論争においてである。ヘーゲルをスピノザ回帰へと促したのは、彼の早熟で才気に溢れた二人の友人、すなわちヘルダーリンとシェリングであった。この二人なしに彼のスピノザ受容、ひいては体系構築が不可能だったと思えるほど、その影響は決定的である。

したがってヘーゲルのスピノザ受容を適切に捉えるためには、ヘーゲルとスピノザとを結びつける媒介者たちが果たした役割を精確に掴まなければならない。そしてそのためには、ヘーゲルと友人たち（ヘルダーリンとシェリング）との関係、そして彼らと彼らの論敵（カントとフィヒテ）との関係、さらに彼らと彼らのスピノザ理解の典拠であった解釈者（ヤコービ）との関係を明らかにする必要がある。

ヘーゲルのスピノザ受容は、彼が論争において最大の武器として用いたスピノザ哲学を厳しく吟味し批判的に摂取したときに完了する。それによって彼自身の体系もひとまず確立したからである。本報告は、『精神現象学』の有名な「実体＝主体」説にいたるヘーゲルのスピノザ受容を三段階に分けて跡づけ、それが体系成立の根幹にかかわるものであったことを示す。

【提題２】

神の死と個の生成－スピノザからヘーゲルを隔てるもの－　　山脇　雅夫（同朋大学）

ヘーゲルは『論理学』「本質論」の「絶対者」章においてスピノザの実体概念を扱っている。そこでヘーゲルは、スピノザの実体形而上学の欠陥として、そこに「人格の原理」が欠けていること、また、そこにおいては認識が外的反省に留まることをあげている。人格の原理は、「概念論」において「個別」概念のもとに捉えられているから、本質論で挙げられたスピノザの欠陥の前半は、スピノザの実体に「個別」が欠けていることと言い直せるだろう。そうしてみるなら、実体を「無数の個の活動によって生み出された共同作品」とした新たな実体概念に、ヘーゲルのスピノザからの離反の契機を認めた佐山圭司の主張は首肯される。

しかし、この新たな実体概念は、そこに含まれる「個」が正確に把握されないならば、全体に対して個を前提するような一種の方法論的個人主義のようなものとなってしまうのではないかと思われる。本発表においてわたしは、ヘーゲルが個というものをどのように把握しているのか、それをヘーゲル哲学の全体を規定

し、ヘーゲルとスピノザを分かつ根本経験とのつながりにおいて明らかにすることを目指したい。

わたしがヘーゲルとスピノザを分かつ根本経験と呼ぶのは、『信仰と知』の末尾で、「思弁的聖金曜日」の根本体験として語られたもののことである。スピノザの肯定的な神に対し、ヘーゲルの神は否定性の神、言い換えれば、神の死において存在する神である。わたしの第一の論点は、この神の死の経験と個の成立がリンクしているということである。

実体喪失の経験が個の成立にとって不可欠の前提を成していることは、『精神現象学』においてははっきりと描き出されている。『精神現象学』において「個」の原理が生成する過程を叙述する「精神」章の「真なる精神」において描かれるのは、古代ギリシア的人倫世界の没落を通して、アトム的個の原理が成立するということである。『現象学』が示しているのは、個の成立が「実体」の喪失という事態と相即的な出来事であるということである。

また、ヘーゲルにとって神は失われたものとして、その無において存在しているような神であることを押さえて、「本質論」「絶対者」の絶対者の規定を見直すならば、「絶対者」の概念自体に、最初からそうした構造が含意されていたことがわかる。これがわたしの第二の論点である。絶対者は「たんに存在であるだけではなく、本質でもある」とされるが、本質とは「本質論」における定義によれば、「止揚された存在」ないし「過ぎ去った存在」に他ならない。つまり、スピノザの実体概念に呼応するものだとヘーゲル自身が明言する「絶対者」からして、「絶対者の過ぎ去り」と一体となった絶対者なのである。

【提題３】

ヤコービのスピノザ批判とヘーゲル　　吉田達（中央大学）

・ヘーゲルは、ヤコービが『スピノザ書簡』で語った「決死の飛躍 salto mortale」を『精神現象学』の無限判断論に読みこんでいる。「自我＝物」という無限判断が、一方で唯物論的決定論として提示されながら、他方でそれを自己物化によって自己実現する人間の自由の表明に読みかえられるという「転換」は、ヤコービ的な「飛躍」のヘーゲル的な換骨奪胎であろう。

・『現象学』の「絶対知」でヘーゲルは「自我＝物」、「物＝自我」、「自我＝自我」という３つの無限判断を、それぞれ観察する理性、啓蒙、良心の段階に対応させており、しかも、最終段階では、最初の 2 つの無限判断が統合されると述べている。ここからすれば、良心の段階では、「観察する理性」における「自我＝物」と「啓蒙」における「物＝自我」が、最終的に「自我＝自我」に統合されることになる。「良心」において、「自我＝物」を体現しているのは行動する意識であり、「物＝自我」は批評する意識（美しい魂）によって体現されると考えられる。

・ヘーゲルの見るところ、ヤコービがその飛躍によってたどり着いた観点は、個別具体的な場面にかかわって自己物化することに背を向ける「批評する意識」というありかたでしかなかった。

・行動する意識と批評する意識が「良心」の最終段階で相互承認に至るとき、両者はそれぞれにおのれを放棄・外化して「和解の然り」を語りあう。ここには、ヤコービの「決死の飛躍」を補完する、いわば「メタ飛躍」が読みとれる。

・「ヤコービ書評」のヘーゲルによれば、ヤコービにおける直接知がじつは「媒介の排除」によって成りたつような直接性である。この直接性は「精神」に到達するには克服されなければならない。

・『現象学』のヘーゲルは、ヤコービの「決死の飛躍」という発想を生かすには、これを（ヤコービの理解する）スピノザ主義からの飛躍としてではなく、同時代を席巻している唯物論的決定論からの飛躍と捉えるほうが有効だと考えた。

・人間の意識が自己物化によっておのれを実現し共同性を実現するとき、その共同性のただなかに神が現れ

る。この神は「宗教」章であきらかになるように、イエスにおいて受肉する神である。人間の自己物化を肯定的に語るヘーゲルは、イエスにおける神の受肉を「不合理」として退けるスピノザへの牽制をも意図している。

【特別講演】

山口祐弘「ヘーゲルにおける思弁哲学の復権―形而上学の蘇生と論理学の課題―」

ヘーゲルは『論理の学』の第一巻の冒頭で、論理学を「本来的形而上学」と規定する。「形而上学」とは、1801 年の断片“Logica et Metaphysica”と 1804/5 年の「体系構想 II」(『論理学・形而上学・自然哲学』) 以来姿を消していた言葉である。それが、ここで再登場するのはなぜか。そもそも「本来的形而上学」とは、カントが用いた表現であり、肯定的には語られなかったものであった。経験を超えたものの思弁として、それはほとんど独断的形而上学と同義であった。にもかかわらずヘーゲルがそれを継承したのは、独特の意味をそれに持たせてのことであったに違いない。しかも、それは「純粋な思弁哲学」と言い換えられるのである。その「思弁」の意味も、カントとの対比において理解されなければならない。

もとを辿れば、「形而上学」とは、ロドスのアンドロニコスがアリストテレスの著作集を編集する際、アリストテレスが「第一哲学」と呼んだものを「自然学」の後に置いたことに由来する名称である。「タ・メタ・タ・ピュシカ」とは、「自然学の後」という意味であり、あらゆる学に先行するべき第一哲学とは正反対の位置を指す表現である。第一哲学があらゆる学の基礎を解明するという課題を持ち、その反省はむしろあらゆる学の後になされるべきものであると考えれば、その事情は納得がいくかもしれない。しかし、原理の探求という意味では、それはむしろ「タ・プロ・タ・ピュシカ」と呼ぶべきものである。その意味で、アリストテレスはあらゆる学に先立つ概念としての「存在」を形而上学の第一テーマとしたのであった。

ヘーゲルがとりわけ近代以降の形而上学の概念に抗して自己の論理学を形而上学としたのは、アリストテレスの意図を尊重してのことであろうと思われる。しかし、それが論理学と同義とされるのは何故か。そもそも論理学と形而上学はいかなる関係にあるのか。イェーナ大学着任直後のヘーゲルの講義題目が、前任者プラトナー、フィヒテのそれを受けて「論理学・形而上学」であったことは知られている。そこでは、論理学は形而上学の前段階に置かれ、いわば入門的な意味を持つものとされていた。その関係は、「体系構想 II」においても同じであった。だが、そこにおいても形而上学のテーマの幾つかは論理学で扱われ、また論理学の主題が形而上学で論じられており、境界の曖昧化が感じられる。そして、イェーナ期の『エンツィクロペディー』で「形而上学」は消滅し、そのテーマは或いは自然哲学に、或いは精神哲学に委ねられるのである。

これに対して、ニュルンベルク期の論理学を見れば、一般的形而上学とされてきた存在論はもとより、特殊的形而上学の諸部門、霊魂論、宇宙論、神学の諸カテゴリーが、その中で論じられていることが分かる。言わば、論理学が形而上学の役割を引き受けた形となっているのである。こうして、論理学は、カントをさらに超えて、アリストテレスの第一哲学の地位を引き継ごうとするのである。

但し、カントがまったく無視されたわけではない。第一哲学に相当するものを、カントは「超越論哲学」として構想していた。あらゆる学の原理を明らかにすることがその課題であった。もとより、そこには、認識の限界の自覚に基づく制約があった。しかし、その枠内においてではあれ、カントはア・プリオリな原理を生み出す純粋理性の産物を体系的に提示すること、『純粋理性の体系』の構築をめざしていたのであった。ヘーゲルはこの理念を継承しつつ、カントの限界を超えてその実現に努めたと言えよう。そして、乗り越えるべきものは、何よりもカントが「思弁」の停止を要求していたことであった。ヘーゲルはカントのこの要求と対決しつつ、「純粋思弁哲学」を追求したのである。ヘーゲルにお

いて思弁とは何か、そして、その停止の要求が形而上学の断念と表裏しているとすれば、ヘーゲル以前の―カント的―思惟、それを支える論理は何であったか、それは如何に形而上学を困窮させていたかを見なければならない。

本稿では、こうした観点から、伝統的思惟と対決しようとするヘーゲルの論理思想の特質を考える。

【合評会：小井沼広嗣『ヘーゲルの実践哲学構想　精神の生成と自律の実現』】自著紹介

本書は、ヘーゲルがイェーナ時代の後期に執筆した『イェーナ体系構想Ⅲ』（1805/06）と『精神現象学』（1807）を考察対象の中心に据えつつ、そこで展開されている実践哲学的な思索の意義を、ルソー、カント、フィヒテが提示した「自律」の思想の批判的継承という視角から論究したものである。そのさい本書では、《精神の生成》の理路を解明することを中心的課題に据えている。なぜなら、『イェーナ体系構想Ⅲ』はヘーゲル独自の「精神の哲学」が展開されたテクストであり、『精神現象学』は「精神」が諸々の意識の経験を介して具体化される過程を叙述した書物だからである。したがって、ヘーゲルがこれらのうちで展開した《精神の生成》という問題構成のうちに自律思想の批判的継承を読み込むこととは、ルソーが「一般意志」に基づく人民主権という仕方で社会思想として提示し、カントとフィヒテが「実践理性」や「自我」の原理のもとで哲学的に基礎づけようとした「自律」の概念を、ヘーゲルが「精神」のもとで把握し直そうとしたことの意味と射程を明らかにする企てとなる。

第一部では『イェーナ体系構想Ⅲ』における精神哲学としての人倫構想を主題的に検討している。第一章では、イェーナ期の思想的変遷を経つつ『イェーナ体系構想Ⅲ』において結実するヘーゲルの意志論が、フィヒテの知識学において展開された衝動論を批判的に継承した《衝動の陶冶》という理路を内包するものであることを論じている。第二章では、『イェーナ体系構想Ⅲ』におけるヘーゲルの陶冶論ならびに「普遍意志の構成」の議論が、ルソーが『社会契約論』で説いた「一般意志」の概念ならびに「全面的譲渡」の論理を批判的に継承するなかで展開されたものであることを明らかにしている。

第二部では、『精神現象学』の「意識」章から「理性」章までの意識経験の歩みを、カントの説く「統覚の統一」やフィヒテの「自我」に置き換わる原理として「精神」を提示しようとするヘーゲルの試み、という視角のもとで考察している。第三章では、『精神現象学』の考察に先立ち、カントとフィヒテの自我論、ならびに両者における《共同主観性》の問題を検討している。第四章では、同書における意識から自己意識への移行のうちに含意された、《意識は本質的に自己意識である》という主張の意義と射程を、「無限性」の概念ならびに「自己意識は欲望一般である」というテーゼに着目する仕方で考察している。第五章では、同書の「自己意識」章における意識経験を、自己意識が遂行する「否定性」の契機の進展と、それを通じた《共同主観性》の生成過程という視角から検討している。第六章では、《カテゴリーの充実過程》として展開される「理性」章の意識経験のうちで、カント流の「統覚の統一」や実践理性の立場が批判的に乗り越えられる様を跡付けるとともに、フィヒテが説く「自我」と対比させつつ、ヘーゲルが提示する「精神」の基本構造を明らかにしている。

第三部では、『精神現象学』における道徳性のモチーフを、カントの実践哲学の批判的超克という視角から検討している。第七章では、ヘーゲルの幸福理解とその達成のための理路を、カントの「最高善」概念との対決という視角から検討している。第八章では、「精神」章の「良心」論で論じられる「悪」の生成とそれを解消するものとしての良心間における相互承認の成立を、カントの道徳性がはらむ二元的対立の克服という視角から検討している。

【会場校アクセス】 ＊下記 宇都宮大学 HP を元に作成

https://www.utsunomiya-u.ac.jp/convenient/campus-map.php

宇都宮大学（峰キャンパス）は、JR 宇都宮駅から東へ約 2 キロ（バス 9 分）、東武宇都宮駅から東へ約 3 キロ（バス 25 分）の位置にあります。

※　陽東キャンパスではなく、峰キャンパスですのでご注意ください

＊東武宇都宮駅と JR 宇都宮駅は離れていますのでご注意ください。JR 宇都宮駅の方が宇都宮大学にアクセスがよいです。

■駅からのアクセス方法（バス　&　タクシー）

JR宇都宮駅西口から

３番乗り場（JRバス）	清原台団地行、芳賀町役場行、祖母井行、茂木行、ベルモール行など 乗車時間約15分「宇大前」下車徒歩1分
14番乗り場（関東バス）	真岡行、益子行、海星学院行、ベルモール行、など 乗車時間約15分「宇都宮大学前」下車徒歩1分

JR宇都宮駅東口から

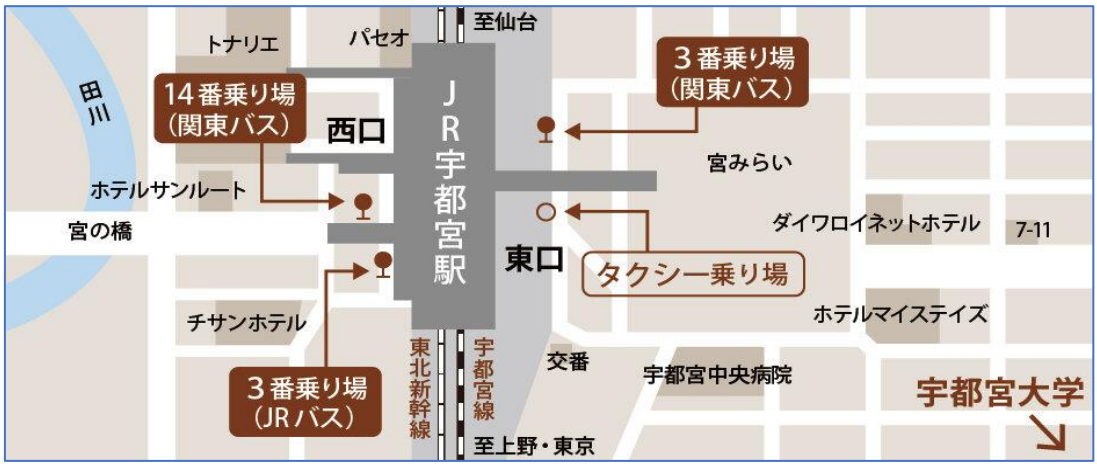
３番乗り場（関東バス）	宇大循環線（左回り）、乗車時間約10分「宇都宮大学前」下車徒歩1分 宇大循環線（右回り）、乗車時間約25分「宇都宮大学前」下車徒歩1分
４番乗り場（関東バス）	卸団地循環線、乗車時間約8分「宇都宮大学前」下車徒歩1分
タクシー	約５分

東武宇都宮駅から

１番乗り場（関東バス）	すべての便 乗車時間約25分「宇都宮大学前」下車徒歩1分
東武駅前（JRバス）	清原台団地行、芳賀町役場行、祖母井行、茂木行、ベルモール行など 乗車時間約20分「宇大前」下車徒歩1分
タクシー	約１０分

＊タクシーの場合・・・JR 宇都宮駅東口の方が西口よりも大学に近いため、タクシーの場合東口からお越しください。峰キャンパスには、ほぼ初乗り（5 分ほど）で到着します。

＊バスの場合　・・・JR 東口・西口両方にあります。時間帯によりますが西口の方が若干本数多いです。

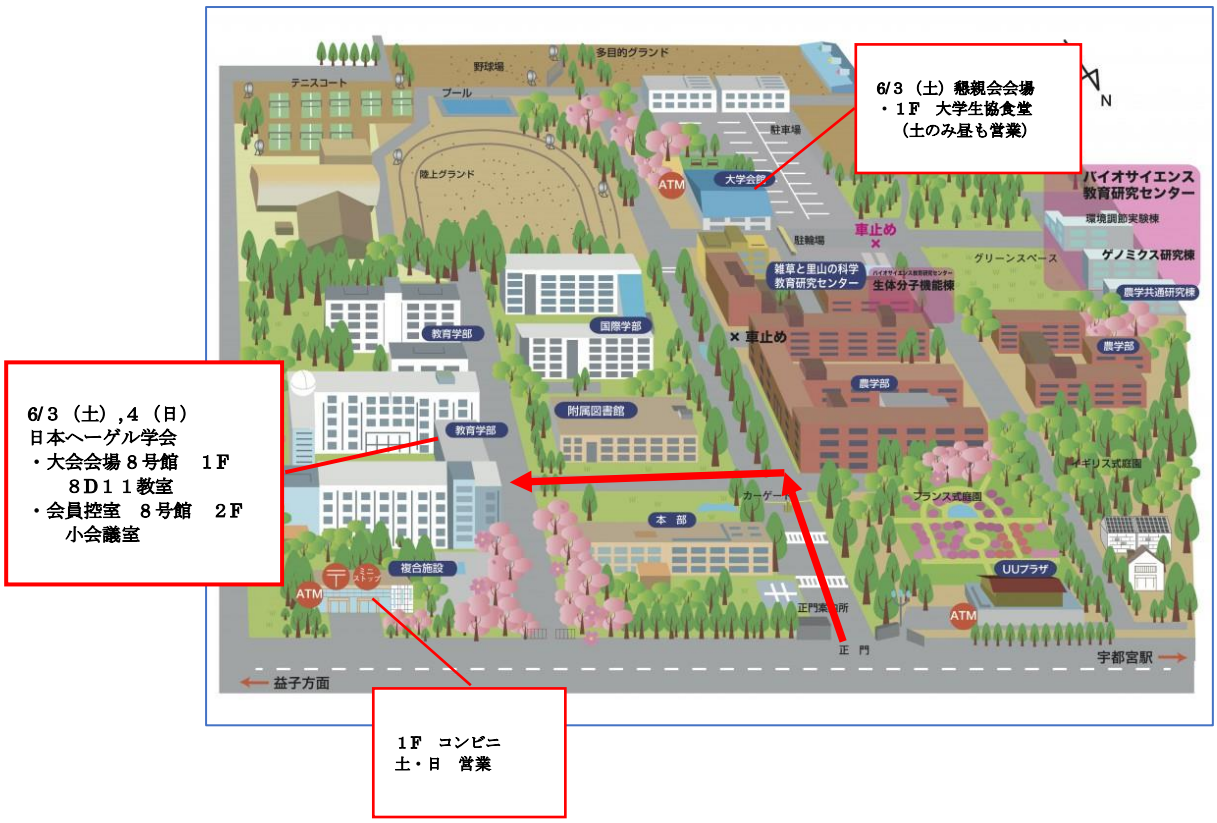


【会場校施設説明】宇都宮大学　**峰キャンパス**（＊陽東キャンパスではありませんのでご注意ください）

宇都宮大学　峰キャンパス　マップ

下記 宇都宮大学　バイオサイエンス教育センター　ウエブサイトを元に作成

https://c-bio.mine.utsunomiya-u.ac.jp/about-c-bio/access.html



■**大会会場**（　峰キャンパス　８号館　１F　８D１１　大教室）

「正門」からまっすぐメインロードを進み、最初の交差点で左にお進みください。正面の建物が 8 号館です。8 号館正面入口からは、そのままま っすぐ奥の場所に大教室（８D11）があります。

■昼食について

・生協食堂（大学会館）（大会会場から徒歩４分ほど）

６/3（土）のみ営業（11:30～13:30 ただし授業日のため若干込み合う場合があります）

６/4（日）閉店

・コンビニ（ミニストップ）（会場から徒歩１分ほど）

両日とも営業

＊ご持参・購入されたご昼食は、**会員控室**（8 号館　２F　小会議室）でおとりいただけます。

■懇親会（６/３（土）大会終了後）

会場：生協食堂（大学会館）（会場から徒歩４分ほど）